

日展ニュース

No. 178

<https://www.nitten.or.jp/>

令和3年7月27日発行

編集兼発行人 土屋 禮一

第85回 定時総会



あげ潮 藤本東一良

第85回定時総会報告

日時 令和三年六月十四日
午後二時

場所 上野精養軒 桜の間

出席 三九五名（含議決権行使書）

奥田理事長が議長となり、左記の事項について報告、説明し承認可決した。

- (一) 不動産の売却承認について
- (二) 令和二年度事業報告承認について
- (三) 令和二年度決算承認について
- (四) 令和三年度事業計画書報告について
- (五) 令和三年度収支予算書等報告について
- (六) 会員人事報告について

その他の報告事項

- 1 令和三年度 称号授与予定者報告について
- 2 改組新 第七回日展巡回展開催報告について他

会員新人事

新会員

令和三年三月二十四日開催の理事会において、左記二十二名が選出された。

（令和三年四月一日付）

日本画

佐々木淳一 佐藤 俊介
安田 敦夫 山田 毅
米田 実

洋画

大淵 繁樹 鍵主 恭夫
田中 里奈 西田 陽二
前田 潤

彫刻

井上周一郎 上田 ふみ
白石 恵里 森 矢真人

工芸美術

青木 宏憧 小田 謙二
木谷 陽子 武腰 冬樹
古瀬 政弘

書

尾西 正成 竹内 勢雲
寺岡 棠舟

委員会委員新人事

令和三年三月二十四日開催の理事会において、左記委員会委員が選考された。

諮問委員会

外部委員

秋元 雄史（練馬区立美術館長）
黒川 廣子（東京藝術大学美術館長）
島谷 弘幸（九州国立博物館長）
室伏きみ子（前お茶の水女子大学学長）
八牧 暢行（前中央労働災害防止協会理事長）

内部委員

日本画

米倉 正美

洋画

西田 伸一

彫刻

池川 直

工芸美術

藤田 仁

書

井上 清雅

令和三年五月二十七日、書面による理事会決議によって、左記委員会委員が選出された。

日展ニュース委員会

日本画

川田 恭子 水野 收

洋画

清水 優 前原 喜好

彫刻

堤 直美 野原 昌代

工芸美術

月岡 裕二 友定 聖雄

書

西村 東軒 福光 幽石

出版委員会

日本画

河村 源三 菊池 治子

洋画

平野 行雄 丸山 勉

彫刻

寒河江淳二 堀内 有子

工芸美術

上原 利丸 佐治ヒロシ

書

植松 龍祥 日比野博鳳

広報委員会

日本画

東 俊行 曲子 明良

洋画

大友 義博 西房 浩二

彫刻

寺山 三佳 中原 篤徳

工芸美術

林 香君 藤田 仁

書

井上 清雅 牛窪 梧十

新準会員

令和三年三月二十四日開催の理事会において、左記二十二名が選出された。

令和三年四月一日付

第一科 日本画（一名）

竹内恵利子

第二科 洋画（五名）

阿部 良広 茅野 吉孝
佐渡 一清 中土居正記
松本 貴子

第三科 彫刻（七名）

大亀 清壽 坂本 健
高砂 晴光 寺澤 孝明
長谷川倫子 横山 丈樹
脇園奈津江

第四科 工芸美術（五名）

佐々木眞澄 武田 司
西本 直文 福富 信
森 克徳

第五科 書（四名）

佐井 麗雪 深瀬 裕之
宮負 丁香 山口 啓山

新会友

令和三年三月二十四日開催の理事会において、左記一〇七名が選出された。

令和三年四月一日付

第一科 日本画（八名）

岩永 恵理 恵莊 毬
岸 春美 佐藤 博子
諏訪 智美 立花 大聖
内藤 由郎 吉岡 珠恵

第二科 洋画（三十三名）

青柳 幸子 秋山 範子
石井美沙枝 稲田 栄策
内山千寿子 木島 芳雄
来山 倫子 岸本 修
佐藤景紗美 佐藤 信夫
佐藤 政弘 佐野 慎一
坂井 信子 志水 和司
白石美佐子 杉浦 春一
高木 満智 高田 恵子
高橋 健一 高橋 洋一
武石 英孝 立木 雅子
永尾 和子 縄稚 誠基
西本 正義 長谷川雅敏
原田 一裕 福田 佳史
藤本 正男 山田紀代子
吉田 孝 吉塚 春生
渡辺せつ子

第三科 彫刻（五名）

奥森日向子 田中 宏典
細川 大潤 柳浦伊和夫
横田 朋子

第四科 工芸美術（二十名）

生田 淑子 鬼木 英幸
鍛冶ゆう子 上端 伸也
川崎久美子 黒阪かおり
小西 潤 越 由子
近藤 賢 曾根 紀子
高崎真知子 高橋 和則
中谷 千景 野中 彩
能宗 京子 三田村利美
山岸 青矢 吉澤 秀幸
吉田みち子 龍木 秀子

第五科 書（四十一名）

阿部 旭祥 赤石 律扇
井上 虹雨 池田由利子
一色 久子 上籠 鈍牛
大橋 曾水 金子 令澄
鎌田 光暘 北川 澄風
久保 蓬扇 黒田 玉洲
高田 千恵 佐藤 白蘆
坂井由美子 鹿嶽 洋苑
島村 翠月 杉村 玉鳳
関 踏青 高野 芳月
高村 皇城 竹内 墨洋
竹原 悠崖 武田美奈子
谷口 成孝 筒井 麗子
中川 青玲 中村 大郁

西荒井宏林 原 青丘
平山 寛川 藤林 聚香
古田 祥扇 前田 和美
松浦 龍坡 松尾 光晴
松本 采耿 森 光翔
八巻 水鷗 山本 静園
吉田万里子

令和三年三月二十四日開催の理事会において、左記の一名が令和二年度の新会友として追加承認された。

令和二年四月一日付

第五科 書 石原 裕園



114 since 1907

日展

第8回 日本美術展覧会 公募

日本画 Japanese Style Painting	洋画 Western Style Painting	彫刻 Sculpture	工芸美術 Craft as Art	書 Sho
個人展入日 10.14(日) 15.15(日) 団体展入日 10.15(日)	個人展入日 10.8(日) 9.9(日) 団体展入日 10.10(日)	個人展入日 10.16(日) 17.17(日) 団体展入日 10.17(日)	個人展入日 10.8(日) 9.9(日) 団体展入日 10.10(日)	個人展入日 10.5(日) 6.6(日) 団体展入日 10.5(日)

入展 日本画・洋画・彫刻・工芸美術 公募 第8回日本美術展覧会 入展受付（東京都港区六本木7-22-2 TEL:03-6612-9921 FAX:03-6612-9922）
 入展 書 公募 第8回日本美術展覧会 入展受付（東京都港区六本木7-22-2 TEL:03-6612-9921 FAX:03-6612-9922）
 入展 彫刻 公募 第8回日本美術展覧会 入展受付（東京都港区六本木7-22-2 TEL:03-6612-9921 FAX:03-6612-9922）
 入展 工芸美術 公募 第8回日本美術展覧会 入展受付（東京都港区六本木7-22-2 TEL:03-6612-9921 FAX:03-6612-9922）
 入展 書 公募 第8回日本美術展覧会 入展受付（東京都港区六本木7-22-2 TEL:03-6612-9921 FAX:03-6612-9922）

第8回 日本美術展覧会 2021年 10.29(金) 日 - 11.21(日) 火曜日休館 国立新美術館

日本美術展覧会 2021年 10.29(金) 日 - 11.21(日) 火曜日休館 国立新美術館

※ 開催情報は「日展ウェブサイト」<https://nitten.or.jp/> でご確認ください。主催：公益社団法人 日展

The Japan Fine Arts Exhibition



第8回 日本美術展覧会

会場 国立新美術館
東京都港区六本木7-22-2

会期 令和3年10月29日(金) ～ 11月21日(日)
休館日 毎週火曜日

観覧時間 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)

主催 公益社団法人 日展

※ 新型コロナウイルス感染症対策のため、入場制限を行う場合がありますので、あらかじめご了承ください。

最新の開催情報は「日展ウェブサイト」<https://nitten.or.jp/> でご確認ください。

本年度の開催要綱が出来上がりました。
ご応募の流れ

応募に必要な
資料の請求
(切手を郵送)

日展事務局より
開催要綱・出品
申込書等を郵送

作品の搬入

封筒に左記のものを同封の上、日展事務局宛にご郵送ください。

・部数に応じた送料分の切手
・必要部数、送付先の住所、氏名を明記した紙

《送付先》

〒110-0002 東京都台東区上野桜木2-4-1「日展事務局 出品申込書係」宛
送料：1部 2部 140円、3部 210円、4部 250円
6部以上ご希望の方は事務局までお問合せください。TEL 03(3821)0453

※ 返信用封筒は不要です。

※ 速達をご希望の方は、速達希望と明記の上

送料+速達料金(290円)の切手をあわせてお送りください。

切手が事務局に到着次第、左記の書類を郵送いたします。

・開催要綱
・出品申込書
・鑑査結果通知用の封筒

《個人搬入の方》

各部門で決められた搬入日および搬入場所(開催要綱参照)に、
出品申込書・鑑査結果通知用の封筒・出品手数料(12,000円)
を添えて、作品を搬入してください。

《搬入業者をご利用の方》

各搬入業者の所定の手続きにしたがい、作品の搬入を依頼してく
ださい。業者ごとに締切期日等が異なる場合がありますので、詳
細は直接各社にお問い合わせください。

(宅配便での受付はしていません。)

日展会員、準会員、会友の方々の出品票発送予定

○ 会員、準会員、前年度特選受賞者…9月初旬頃

○ 会友…8月中旬から下旬頃

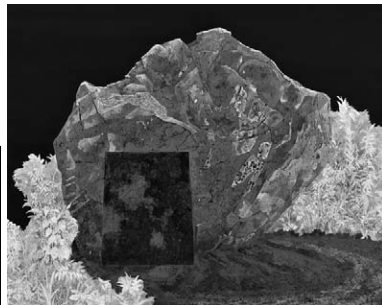


《飼い慣らされた自然》 安田敦夫

私の人生において一区切りを迎えたこの機会に、描くことを人生の柱に据えることを決めた頃の自分と対話することを想像してみました。

あの頃の自身の気持ちを裏切らない姿勢で取組み続けたいです。

日本画 安田敦夫



《岩と鉄と草と》 佐々木淳一

ご挨拶申し上げます

新会員より

目の前にある対象物の向こう側を見つめ、感性を研ぎ澄ませ、心の中に響く象を追求して参りました。この度、会員になり日展の一員として改めて自己研鑽し精進して参りたい所存です。

日本画 佐々木淳一



《秋の伝言》 佐藤俊介

作品は自身と主題との関係性のみに成り立つものとの姿勢を心掛けています。この度は其れに大きな責任が加わったのだと謹んで受け止めております。

日本画 佐藤俊介

作品図版

改組 新 第7回日展出品作
2020（令和2年）



《雷鳴の記憶》 山田 毅

近代日本の芸術文化を牽引してきたこの展覧会の一員たる重みを感じています。

会員間の相互の刺激や自身の切磋琢磨を通じて、21世紀の芸術の可能性を探ってまいりたいと思います。

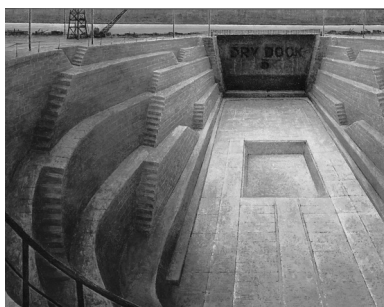
日本画 米田 実



《雷鳴》 米田 実

この度、日展会員へ推挙頂き身の引き締まる思いです。日展初入選より約30年が経ちます。多くの皆様に支えて頂き、これまで描き続けて来られました事に感謝致しております。

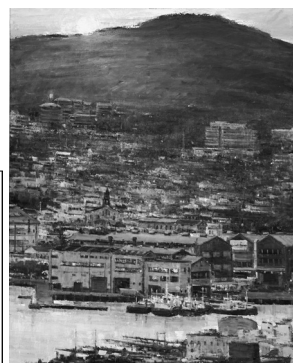
日本画 山田 毅



《5号船渠》 鍵主恭夫

日本一の展覧会と希望にもえ頑張ってきました。努力はむくわれると信じて一步一步、前進あるのみ。緒先輩方が作り上げて来た日展の名に恥じぬよう精進してまいります。

洋画 大淵繁樹



《長崎港夕映え》 大淵繁樹

この度は伝統ある日展会員の栄誉を賜り感謝申し上げます。伝統を損なわないように、たえず挑戦する気持ちを忘れず、新しい時代に向かって進化したいと思っております。

洋画 鍵主恭夫



《風人圖》 前田 潤

日展の会員に推挙して頂き身の引きしまる思いです。日展の為、美術界の為、そして木版の普及の為一層精進して参ります。作品制作を続けられる事に感謝し、日展会員の一員として頑張りたいと思います。

洋画 田中里奈



《リズム》 田中里奈

この度は、会員委嘱の報を賜り誠に有難う御座いました。喜びと共に改めて身の引き締まる思いがしております。奢らず守らずの気持ちを持って精進して参る所存です。

洋画 前田 潤



《思いを馳せて》
上田ふみ

地元北海道在住では約30年ぶりの洋画日展会員、現在は98歳の書道の先生と二人のみです。大学で教鞭をとっている立場から、若い学生等に作家として精進している姿を見せることで日展を身近に感じてもらいたいと思います。

洋画 西田陽二



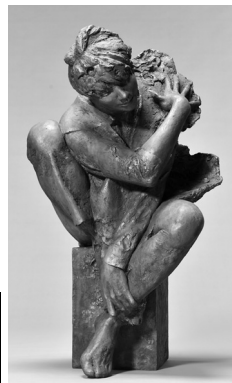
《チャイナドレス》 西田陽二

一作ごとに見えてくるものがあり、日々、追い詰めた先ようやく作品に立ち現れてくるものがあるから、制作し続けられています。
恩師の教え「心震える作品をつくられているか」を問い続けて参ります。

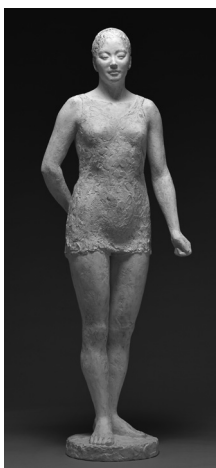
彫刻 上田ふみ

とても身の引き締まる思いです。これまでご指導くださった先生方の存在あつてのことで、心より感謝申し上げます。会の一員として新たな一歩を踏み出せることを大変うれしく思います。

彫刻 白石恵里



《夜明けの風》
白石恵里



《灯》 森 矢真人

この度は、会員にご承認いただき誠に有難うございます。ご指導いただいている先生方への感謝を胸に、日展の発展に寄与できるよう更なる精進に努めます。微力ながら、素材と一心に向き合い清新な作風を目指してまいる所存です。

彫刻 井上周一郎



《独繭》 井上周一郎

コロナ禍でも芸術文化の灯を絶やさない為と開催された日展。改めて感ずる歴史と伝統日展の存在の大きさと重要性。日展の一員として、更に精進し、支えて頂いた方々に感謝しながら、今後も作品制作に励んで参ります。

彫刻 森 矢真人



《宵の街》 武腰冬樹

石川県で九谷焼をしている者です、会員になり大変嬉しく思います。
これを期に尚一層制作活動に励む所存でありますので今後とも宜しくお願い申し上げます。

工芸美術 武腰冬樹



《冬華》 木谷陽子

初入選から25年、作品を創る事で大きく成長させて頂きました。この度、日展会員に推挙頂き、より一層の精進を念じ、微力ながらも日展工芸の発展と可能性の追求に寄与できる事を嬉しく思っております。

工芸美術 木谷陽子



《守箱 胞》 青木宏憧

毎年、日展で作品発表ができることに感謝しております。尚且つ会員の一員になれたことは大変光栄です。「工芸って面白いね！新しい初めて見た！」という感想が鑑賞者から聞ける様に常に挑戦し精進してまいります。

工芸美術 青木宏憧



《質量の外側》 小田謙二

この度の会員委嘱を大きな機会と捉えています。人形の身体デザインの魅力と、情感のある日展らしく高い造形性を目標にしようと考えています。その上で更に繊細で明快な作品作りを目指していきたいとも思っています。

工芸美術 小田謙二



《Messenger ～流光の果てに～》
古瀬政弘

去年は、コロナ禍での芸術文化の担う役割について、改めて考える機会となりました。今年は、自身の更なる技法表現の追究と共に、変容する社会の中でどのようなメッセージができるのかを模索していきたいと考えています。

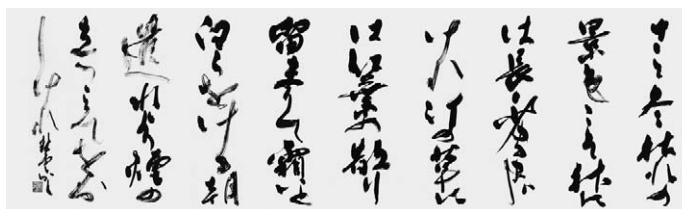
工芸美術 古瀬政弘



《卿雲》 尾西正成

学生時代より日展を心待ちにし、その玉作に心躍らせていました。この度会員を拝命し、その名に恥じぬよう更なる精進を重ねる所存です。気持ちは学生の頃のまま、制作姿勢も相変わらずの愚鈍ではありますが、何卒宜しくご鞭撻お願い致します。

書 尾西正成



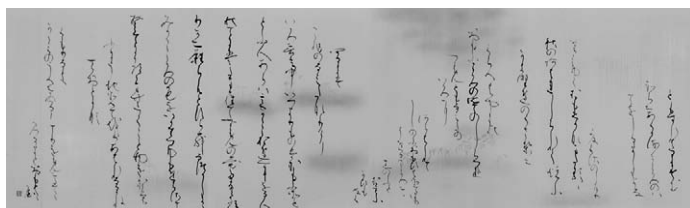
《徒然草抄》 竹内勢雲

日展会員にご推挙頂き身の引き締まる思いです。会員の名を汚さないように努力する決意を抱きつつも、今一度初心の頃に好奇心旺盛で純粋に取り組んでいた気持ちを忘れないように邁進したいと思います。

書 竹内勢雲

2度目の特選から14年目、この度会員にご推挙頂きました。平安朝の多くの古筆から学んだ知識、和の感性、作品に情緒を織り込む工夫等を考え、これからも努力精進を重ね、かなの美を追い求めていく覚悟です。

書 寺岡棠舟



《西行の歌》 寺岡棠舟

私のテーマ

(洋画) 樋口文子



初入選以来、十年程テーマは女性像でした。原始女性性は太陽であった、と言われるように女性を、豊かさ・慈愛・祈りの象徴としてとらえ表現したいとの思いからでした。

日展を観に上京したある日、夕暮れの雑踏の中、ヴァイオリンの音と共に人形使いの影が浮かんで見えました。絵になると思い急いでスケッチをし、それ以来もう十年程このテーマを追い続けています。大道芸人には自由がある反面、厳しさもあるでしょう。異国の青年を放浪の旅に駆り立てたものは何なのだろうか？横顔に厳しさが滲んでいた青年も今は中年となり終始にこやかで、子供が四人もいるらしい。

その様な中コロナ禍で外出規制となり、それは絵画活動を半分狭められた感があります。発表するという事は、緊張もあります大きなモチベーションであります。上京し先生方のご指導を受けられ、仲間達と交流出来る事がいかに重要か感謝するばかりです。

一日も早いコロナ禍の終息を願います。

(鹿児島県在住)

私を画家にしてくれる「日展」の世界

(日本画) 平野美加

私は、周りを山々に囲まれた緑豊かな埼玉県秩父で生まれ育ちました。

若いころを振り返ると、東京で開催される絵の世界が煌めいてみえて、たった六年しか住んでいない東京にしがみついていたような気がします。

今では、五十年住んだ秩父の良さ、身近に広がるこの風景の良さも当たり前ではないのだとわかってきました。秩父の澄んだ空気に広がる風景、木々からこぼれる光は本当に愛おしく、その気持ちを大事にし、私にしか描けない絵を描けるようにと日々精進しています。

私は、絵を描く時間が思うように取れない年も、いい絵が描けないと感じた年も、どんな年も毎年必ず出展すると決めています。画家としての気持ちを忘れずモチベーションを高められる「日展」があるおかげで、絵を描き続けられているのです。

秩父には、「秩父銘仙」絹織物があります。昔（大正から昭和初期）農家の女の人達が夜なべで一糸一糸丁寧に紡いで一反を織り上げました。私も、秩父の先人たちの意思を大切に一筆一筆丁寧にこれからも作品作りを重ねていきたいと思っています。

(埼玉県在住)



各地からの

先人の思いを受け継ぎ

(彫刻) 横山丈樹

私の住む富山県南砺市井波は、伝統工芸『井波彫刻』が盛んな、日本で有数の木彫の街です。二〇一八年には「日本遺産」にも認定され、現在約一八〇名の彫刻師が活動しています。この木彫刻の技術を生かし日展で活躍している作家が

日展出品への思い

(工芸美術) 井上 絵美子

私は大阪府堺市で生まれ育ち、京都の大学で漆芸を学び、卒業後も制作の道へと進みました。当時の私にとって日展は異世界の様な遠い存在に感じられていました。

制作活動が続けている中で、東京の大きな展覧会で多くの方々に作品を観ていただく事、沢山の作品の中で自分の作品を見続ける事によって得られるものはとても大きいものだと思われ先生にご教示いただき、私の視界が開けました。そして改組新第一回日展に初出品、初入選させていただき、初めて上京して訪れた日展では、会場中に広がる作品に込められた大きな熱量に圧倒され、肌で感じた緊張感を今でも鮮明に覚えております。

以降毎年上京し、変わらぬ迫力の中に身を置き自分の作品と対峙する時間は、次の作品への出発点としてとても大切な時間となつていきます。また、諸先生方よりいただける多方向からのアドバイスは私の知見をより一層広げてくださいます。これからも感謝を忘れず、一歩ずつじっくり歩みを進めて参りたいと思います。

(京都府在住)



出品者の思い

所感

(書) 小西 斗虹



地方の大学の教育学部で書写書道を担当しております。少し前に大学との併任で、附属幼稚園長・小学校校長を務めました。小学校の毎週の朝礼では、専ら文字に関する話をし、幼稚園では水書板に書初めをしたり、発泡スチロールを使った親子ハンコ教室を開催したりしました。昔も今も子どもたちの文字への

関心は、我々の思う以上に高いと感じます。

ハンコ押印廃止の流れなど、世の中は急速にデジタル化しています。そのような時代に、書はどのように変化していくのでしょうか。時代の要請にあわせて変化していかなければならない部分と、変えてはならない部分、さらに大切に後世に伝えていくべきものがあると思います。

作家として少しでも良い作品を作りたいの言うまでもありませんが、文字文化を次の世代に受け渡すという使命感だけは失わないようにしたいと思います。

(香川県在住)

「彫刻」「工芸美術」と合わせて約二十名おり、私もその中の一人となります。この流れは先達(祖父もその一人でした)が約八十年前、職人として研鑽された木彫刻の技術を生かして日展美術の世界への扉を開いた時から続いています。

このような背景のおかげで今も街には作家を応援する雰囲気があります。搬入直前に作業が深夜まで及んでしまった時は、近所の方々にとても申し訳なく思うのですが、翌朝隣人から「昨日は夜中まで頑張ってたね、最後まで頑張られ」と優しい言葉をかけて頂く事が何度もあり、励まされます。

先人達の技、新たな表現への挑戦、それと共に自然と育まれた土地柄。強くて温かい思いを力に、更なる先へと、これからも生まれ育ったこの地から挑戦していきたいと思っています。

(富山県在住)



作家人生—私の仕事—

先生の言葉

第一科日本画 理事 村 居 正 之



《暮れゆく時》

(平成30年 改組 新第5回日展出品作)

文部科学大臣賞



青塔社スケッチ旅行 岡山県牛窓
前列中央が師池田遙邨先生、その右が
佐竹徳先生（洋画家）（昭和52年頃）

《ティラの町》

(平成4年 第24回日展出品作)



《椅子と赤い布》

(昭和46年 第3回日展出品作) 初入選



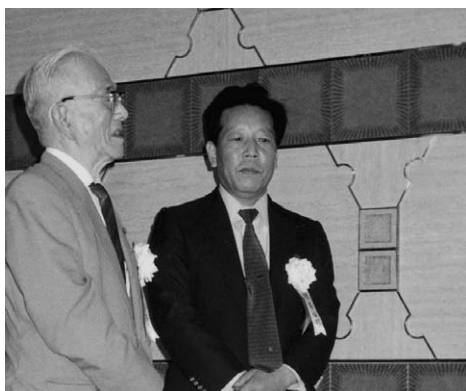
池田遙邨、池田道夫両先生に師事して五十年近く、先生方が主宰する画塾「青塔社」で勉強してきました。「聞く耳を持つて努力すること」遙邨先生の教えです。私は先生と出会ってから、この言葉を心の真ん中に置いて歩んできました。何より大事なことは、素直な気持ちと真つすぐな姿勢を守ることです。懸命に努力すれば必ず道は開けると信じています。時には思うように描けずに苦しみ、悩み、易きに流れそうになります。同じ夢を抱く友と語り、競い、励まし合ってきました。遙邨先生は「批評を受けて自分を鍛えなさい」とも言われました。二十六歳の時、友人と二人で初めてヨーロッパ旅行に行きました。帰国後、記憶とその時のデッサンを基に制作しましたが、先生に「絵に現実感がなくなりつつある」と指摘を受けました。

やや情感に欠ける結果となってしまうのを痛感し、自分の足元を見つめ直すため、再びヨーロッパに二ヶ月ほどスケッチ旅行に赴きました。じっくり腰を据えることによって対象の造形的な面白さだけでなく、対象を取り巻く空気感まで感じることでできたように思います。その後、重層的な絵作りを探るようになりました。

日本だけでなくヨーロッパでもアメリカでも、風景の中に融け込み、風の心地よさや雲の流れ、樹木草花の彩り、都会の喧噪や異国の匂い、対象を包む目に見えぬ粒子まで感じる大切なのです。対象の美しさが自分の中の美意識と響き合って生まれる素晴らしい感覚を、どうすれば作品として表現できるだろうかと思ひ、制作活動が続いています。

今、大学で学生たちと交流を持つ中で、若く瑞々しい感性を持ちながら、どんな欲に吸収しようという彼らの姿勢に学ぶことも多いです。そのようなときに、遙邨先生の言葉が思い出されます。「僕は、勉強する子が好きです」と。

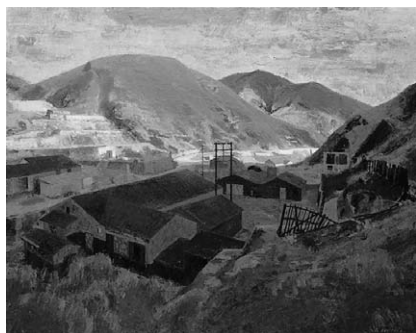
画業半世紀を超えてなお、先生の言葉を追いつけています。



恩師渡邊武夫先生と

《北海の岬》

(平成27年 改組 新第2回日展出品作)
内閣総理大臣賞



《鉾山寥乎》

(昭和62年 第19回日展出品作) 特選



《街の見える丘》

(昭和37年 第5回日展出品作)

北の大地に自分を探して

第二科洋画 副理事長 根岸 右司

教職に就きながら絵を描く人生を歩もうかと漠然と夢を抱き地元の埼玉大学に入った。そこで幸運にも生涯の師となる渡邊武夫先生との出会いが待っていたとは夢にも思わなかった。四年生の時先生のアトリエに招かれ絵のご指導をいただいた時、当時の第四回新文展で二十五歳の若さで特選を受賞された「老図書館長Tさんの像」がアトリエにあり、それを見て感動で震えが止まらなかった。卒業と同時に教職に就き、その年の昭和三十六年第四回日展に入選出来た。埼玉県庁の小高い丘から見下ろし現場で描き、翌年も同じ場所から角度を変えて描いて出品した。

その後制作に行き詰まって悩んでいた頃、足尾銅山の風景に巡り合った。山肌が黒々と焼き爛れ、社宅は廃墟と化し人々は去ってしまった。この自然の中で茫然と立ち竦んでしまい衝撃に心の置き場がない。この感情の真実が何なのか、自然と心の中で発酵するのを静かに待った。第十九回日展に「鉾山寥乎」と題し出品し特選をいただいた。当時勤務していた埼玉県立浦和高等学校の全校一五〇〇人の男子生徒を日展見学に送り出し祝ってくれた。

心機一転新しい題材を求めて北の大地へ、空から眺める北の大地は一面の銀世界、凍てつく雪道を慣れないレンタカーで走る。そこには手付かずの自然が息づき、三月の優しき光の雪原は神秘的な美しさに包まれ、心身が無垢となり自然と一体となっていく自分がそこにおり、この旅が私の人生の大きな転機となった。

大学卒業から六十歳まで色々な方に支えられ教師と絵を描く人生を歩ませていただけた。それぞれの生活の中で経験を積み重ね、教師も画家も別の道でなく一筋の同じ道と信じている。

根岸右司先生は令和三年五月二十六日に逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。



武蔵野美術大学
4年生



徳川家康像制作風景
アトリエにて（令和元年）



七夕会 研修旅行（昭和60年）左後ろから時計回りに、横山祐三、
浦山一雄、神戸峰男、市村緑郎、能島征二、堀豊之、木下繁、
小森邦夫、平野富山の各氏（撮影：堤直美氏）



《麒麟児》（令和元年 改組 新 第6回日展出品作）

私の原点

第三科彫刻 副理事長 神戸峰男

昭和三十八年の春、十七歳の私は名古屋駅二十三時発（準急東海号）で一人上京した。薄暗いホームまで高校の美術教師が見送ってくれた。下宿先には送った荷物が届かず、三日間布団無しで、借りた毛布一枚で過ごした。四畳半一間、台所トイレ共用、初めての一人暮らしが始まった。

下宿の窓からは白くなった三角形の大きな山が見えた。同宿の隣人に山の名前を聞いて笑われた。「東京から富士山が観えるんだ」と嬉しくなった。

美大に入学して初めての課題（宿題）が油絵だった「F二〇号の静物を五月六日まで提出するように」。続けて教務助手が大声で言った。「いらないと思うが油を描いたことのないものがいたら手をあげろ」。百人の同級生が私を見た。手を挙げたのは一人だけだった。学生時代を含めた東京での六年間、点々と移り変えた下宿は桜上水から青梅街道、鷹の台そして荻窪の教会通りから本天沼、高円寺と中央線を中心に六ヶ所を巡った。アルバイトは国立競技場のモザイク制作現場を皮切りに、新宿歌舞伎町での八卦見、映画の特撮、皮バック材のカッティング、和マネキン制作、大型ヨット制作、石膏教材の型取り、ジュエリー製作、家庭教師、作家の遺品整理と資料作成、等々、眠る暇なく乞われた仕事は「やってみます。やらせて下さい」と楽しんだ。全てが初めてで毎日が新鮮だった。

それから六〇年の時間が過ぎた。私は今、大学での師「清水多嘉示には彫刻を学び」、「木下繁には制作に取組む姿勢を学んだ」と自覚する。

このお二人の先生を始めとして、私の生涯において出会い関わりあえた全ての方々が、掛替えのない恩人であり、また指針ともなっている。とりわけ木内岬、三木多聞、西村公朝、山口長男、ヨシダヨシエ、長尾孝明、川口信彦、江藤哲、石田武至、吉田鎮夫、池田満寿夫、井上武吉、これらの先生方は私の血肉の基ともなった。

私は今もその余韻の中にある。



《無鉛釉上絵染付「朝まだき」》
(平成30年 改組 新 第5回日展出品作)



《無鉛釉薬「朧げな記憶」》
(令和元年 改組 新 第6回日展出品作)



《蒼い花器》
(昭和61年 第18回日展出品作) 特選

わが人生の歩み

第四科工芸美術 理事 武 腰 敏 昭

私の生まれ育った町は、以前から九谷焼の産地でもあり、又四、五世紀の古墳の出土する所でもありました。しかし若い頃はあまり焼物に興味がなかったが、周囲の勧めもあり石川県立工芸高校(現 石川県立工業高校)卒業後、金沢美術工芸大学で工業デザインを学んでいる頃、当時世界の第一線で活躍していた工業デザイナーのレイモンド・ローウィの「口紅から機関車まで」というデザインの幅の広さに大変感銘を受けました。レイモンド・ローウィの偉業に憧れていた私は、むしろデザイナーの方に気持ちが傾いていました。その様な状況の中、大学三年生の後期に入る前、陶磁器の教授をされていた北出塔次郎先生が、九谷焼の将来を危惧され、君はやはり陶磁器の方にと強く勧められ、自身の気持ちが揺れる中、与えられた研究室の中で仕方なく釉薬の試験と研究を始めたのがこの世界に入るきっかけとなり、現在に至ったのである。

学生時代はよく友達と一緒に休日になると東京や京都へ日展を見に行き、その頃、日本画の三山と言われた中の杉山寧先生の絵に魅せられ、出品するなら日展の工芸と決めていた。その頃の日展の工芸の立体は形体重視で、小型の油土を使った試作から本作まで大変な苦勞の連続だったのが今でも役立っています。

元々、デザインや絵が好きであった私は、焼物を制作するなら、レイモンド・ローウィの足元にも及びませんが「ぐい呑みから環境造形まで」と思い、県内外に現在まで、ビッグモニュメントや、陶壁を大小合せて二十点程制作させて戴いています。六十五歳の時、金沢学院大学に教授として招かれ、以前から問題視されていた有毒な鉛を排除した無鉛釉薬の研究に入り、何とか無鉛釉薬を完成させ、現在の作品は全て安全な無鉛釉薬で制作しています。

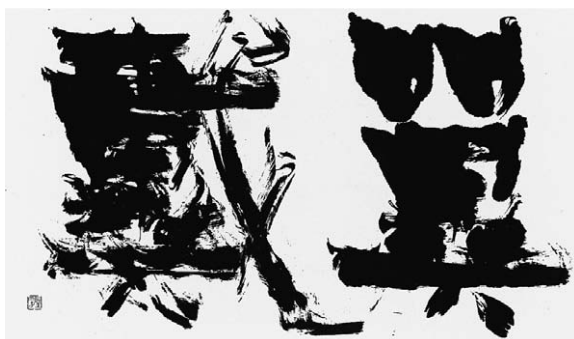
どの様な作品でも工芸作品は近くで技を、離れて感性を大切にしたい「近技離感」が最も必要な事だと思います。



師青山杉雨先生と韓国にて 1985年



《駿歩》(平成27年 改組 新 第2回日展出品作) 文部科学大臣賞



《翼戴》
(昭和49年 第6回日展出品作) 初入選



《天馬》
(平成元年 第21回日展出品作) 特選

今、思うこと―師の教えを宗に

第五科書 理事 高 木 聖 雨

昨年度から続くコロナ禍の中、芸術界を取り巻く環境も一変しました。その中で、新しいことに挑戦する作家、原点回帰をはかる作家、現状の仕事をより深化させようとする作家、色々な姿があったかと思っています。

私自身も色々考えさせられる一年となりましたが、作家としては原点を見つめ直そうという気持ちが大きかったかもしれません。私の場合、原点となるのはやはり師青山杉雨先生の教えでした。ここでは青山先生から学んだ中でも、今私が作品を制作する際に強く意識している「黒と白」について書かせて頂きます。

書における黒は、言うまでもなく墨をのせた筆線、白はそれを囲う余白(要白)のことです。青山先生の作に「黒白相變」という篆書(漢字原初の姿を残す書体)の作品があります。黒と白はともに変化する、あるいは変化しなければならない、という先生の理念を作風とともに文言に示した作ですが、この語は書においては分野を問わず根幹となります。書体や書風、作品形式ごとに一本一本の線質・墨の潤渾・字の大小などを変化させ黒を表現、その黒を生き活きと躍動させる白、このバランスが実に難しいのです。気取った表現になりますが、白という舞台で、黒(文字)という役者を如何に輝かせるか、作家という演出家の手腕が発揮されるわけです。一枚目だけでは演劇は成り立ちません。二枚目、三枚目の役者がいてこそ興味が生まれます。役者にどんな衣裳(線質・墨量)を着させるか、どこに配置(布字)するか、またそれらとともに個性(造形性)を明るくさせる白はどうすべきか。青山先生の師西川寧先生の作品に「文字戯劇」という語の作品がありますが、まさに言い得て妙だと思います。

古人や師の作品や考え方を復習し、それを現代の我々が咀嚼、どのようにアレンジするか。その試行錯誤の結果が現代性に結びつき、新しい表現に繋がっていくのだと考えております。私の作家人生、師の教えが支柱にあると再認識する昨今です。

日展パートナーズについて

日展は、その前身である文部省美術展覧会（文展）の創設から今年一四四年を迎える伝統ある美術団体です。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書と五部門からなる日本最大規模の「日本美術展覧会」には全国から多くの美術ファンのご鑑賞を頂いております。日展は展覧会事業の他に、美術に関する調査研究事業、美術に関する講演会及び講習会事業、美術鑑賞及び創作に関する体験講座事業、美術研究冊子及び図書刊行事業等を通じて、我が国美術文化の振興発展に寄与することを目的としています。

これらの諸事業を推進するには、多くの個人の皆様並びに法人・団体の皆様からの深いご理解とご支援をいただくことが欠かせません。

日展では平成二十九年より、日展の公益事業活動に賛同し、ご支援くださる方々を対象とした賛助会員制度「日展パートナーズ」を設け、運用いたしております。皆様方には、本趣旨にご賛同いただき、温かいご支援を賜りますよう「日展パートナーズ」へのご加入を心よりお待ちしております。

日展パートナーズは、公益事業活動を財政的にサポートいただく賛助制度（寄附制度）で、個人と法人・団体を単位として募集いたします。

（個人）

一口／年 二〇、〇〇〇円

（十口まで申し受けます）

（法人・団体）

一口／年 一〇〇、〇〇〇円

（十口まで申し受けます）

ご寄付いただいた日展パートナーズ賛助金は、毎年開催される「日本美術展覧会」及び関連事業の助成に活用されます。

日展パートナーズにご寄付いただいた方へは、「日展パートナーズ証」が発行され、「日本美術展覧会」の鑑賞など、特典をご利用いただけます。

（詳細の問い合わせ）

日展事務局

TEL 03 (3821) 0453

賛助会員制度《日展パートナーズ》

（掲載希望者のみ 令和3年6月末現在）

●個人

青木晃子様	東 晋一郎様
新井演子様	飯田真未様
石崎國夫様	石崎喜江様
井谷善恵様	井上道守様
今田功一様	今村忠司様
岩田 薫様	奥田節子様
奥田卓三様	角井 博様
梶山純子様	金子美和様
兼重勇希様	栗原直子様
呉 祐輔様	黒田浩平様
児玉安司様	近藤慎男様
坂本美賀子様	佐川かおる様
鈴木千壽様	高木京子様
高木寛史様	田頭明子様
田頭益美様	高田久信様
高橋千笑様	竹本葉子様
田中宏典様	谷本佳美様
土橋正彦様	土屋礼央様
鶴巻百合子様	寺岡宏高様
中島裕子様	中原有三様
西田俊通様	西村潤帰様
西村友子様	野田裕一様
藤田理恵子様	堀 稲子様
松岡庸子様	松原香織様
松本正之様	宮島幸男様
宮原和朗様	村里 暁様
森脇順子様	

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様
医療法人社団 永寿会様
株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 川端商会様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
ゴールド文具 株式会社様
株式会社 靖雅堂夏目美術店様
公益社団法人 創玄書道会様
株式会社 高山草月堂様
株式会社 筑波銀行様
T&T パートナーズ法律事務所様
東洋額装 株式会社様
公益社団法人 日本書芸院様
一般財団法人 ビオトピア財団様
福井素鳳堂様
株式会社 便利堂様
有限会社 丸栄堂様
有限会社 みなせ筆本舗様
株式会社 ミライト・テクノロジーズ様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
株式会社 湯山春峰堂様
菱三印刷 株式会社様
株式会社 リンクス様
株式会社 和光様

改組 新 第 7 回 日 展 巡 回 展

開催順	開催地	会 期	会 場	開 催 者	入場者数(人)
	東 京	2020年10月30日～11月22日	国 立 新 美 術 館	公益社団法人 日 展	52, 105
1	京 都	12月19日～ 2021年 1 月15日	京都市京セラ美術館	日展京都展実行委員会	16, 344
2	名古屋	2021年 1 月27日～ 2 月14日	愛知県美術館ギャラリー	日展名古屋展実行委員会 中 日 新 聞 社	15, 887
3	大 阪	2 月20日～ 3 月21日	大 阪 市 立 美 術 館	日展大阪展実行委員会	30, 271

役員新人事

令和三年七月十九日開催の理事
会において、左記一名が選出された。

副理事長 佐藤 哲

委員会委員補充

令和三年七月十九日開催の理事
会において、左記委員会委員が補
充された。

日展運営委員会

洋 画 佐藤 哲

叙勲

令和三年四月

旭日小綬章

杭迫 柏樹（日展会員）

表紙

「あげ潮」

一九七五年（昭和五十年）

第七回日展

F80・油彩

藤本東一良

（一九一三～一九九八）

大阪市立美術館所蔵

左の先生方が逝去されました。

謹んで哀悼の意を表します。

橋本堅太郎先生（彫刻・顧問） 3・1・31



（日本芸術院会員）

九十歳。昭和五年東
京都生まれ。昭和二
十九年第十回日展初
入選、同五十年日展会員、平成二
年日展評議員、平成八年日展理
事、日本芸術院会員、同九年日展
常務理事、同十一年日展事務局
長、同十二年日展理事長、同二十
一年日展常務理事、旭日中綬章受
章、同二十三年日展顧問、文化功
労者。昭和四十九年第六回日展審
査員（以降合計八回）。

福本 達雄先生（巨画・会） 3・2・17

中尾 英武先生（巨画・会） 3・4・1

田中 昭先生（彫刻・会） 3・5・5

根岸 右司先生（洋画・副理事長） 3・5・26

（日本芸術院会員）

八十三歳。昭和十三
年埼玉県生まれ。昭
和三十六年第四回日
展初入選、平成九年日展会員、同
二十年日展評議員、同二十八年日
展理事、同二十九年日本芸術院会
員、令和二年日展副理事長。平成
八年第二十八回日展審査員（以降
合計七回）。



岡本 昭先生（彫刻・会） 3・6・12

編集後記

この号が皆様のお手元に届いた
頃は、おそらく東京オリンピック
開催中であると思います。長引く
コロナ禍の中、どの様なオリン
ピックになっているのか想像も付
きませんが、無事開催されます事
を祈っております。

緊急事態宣言の延長等により、
総会が延期され、それに伴い発行
日が遅れました事、お詫び申し上
げます。

今号は総会報告、新人事、開催
要綱の案内と新しく会員になられ
た方のコメント、各地で制作活動
を続ける方々の、その地方なりの
苦労や喜びを語って頂きました。
また、各科の理事に「作家人生―
私の仕事―」として貴重なお話を
伺うことができ、その内容に新鮮
な驚きを感じました。

今年の日展もコロナ禍の中での
制約のある開催となりますが、閉
塞した空気を払拭する、希望のあ
る展覧会になります事を願ってお
ります。（堤）

編集委員

川田 恭子 水野 喜好
清水 優 前原 昌代
堤 直美 野原 聖雄
月岡 裕二 友定 幽石
西村 東軒 福光